

学校教育実践学研究, 2021, 第27巻, 101 - 111頁

## 小学校教員養成コースにおける 教職科目間の連携に関する事例研究

—体育科・音楽科において教師に求められる道徳的視点に着目して—

山内 規嗣・木原 成一郎・寺内 大輔

(2020年12月7日受理)

A Case Study of Cross-Curricular Cooperation in an Elementary School Teacher's Training Course: Focusing on Moral Dimension in the Teaching of Physical Education and Music Education at Elementary Schools

Noritsugu Yamauchi, Seiichiro Kihara and Daisuke Terauchi

Currently, the elementary school teacher training curriculum requires cross-curricular cooperation in a variety of subjects. Although there are many possibilities for such collaboration, the authors have chosen to focus on the moral perspective required of teachers in the teaching of their subjects. The moral dimension is not limited to ethics subjects called “Tokubetsu no kyouka doutoku”, but it is necessary in relation to the content of all subjects. Based on this, the authors conducted discussion-oriented classes for students of the elementary school teacher-training course in the A University, and examined the results and issues related to the moral dimension of the classes in physical education and music education.

Consequently, we confirmed that this experience deepened the multifaceted understanding of the content of each subject, and that the students acquired a cross-curricular perspective and recognized the necessity of the moral dimension. On the other hand, we feel the content of inter-subject cooperation needs to be further improved based on the learners' experience of each subject and curriculum in order for all students to benefit from this experience.

Key words : elementary school, cross-curricular cooperation, teacher training, moral education

### 1. 研究の背景

現代日本の小学校教員養成改革は、国立の教員養成大学・学部への在り方に関する懇談会『今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方について—国立の教員養成大学・学部の在り方に関する懇談会報告書—』（2001年）において示された「モデル的なカリキュラム開発の必要性」に基づき、開設科目間での連携性を高めて包括的・体系的な教育を行うことで、学生の実践的指導力を向上させることを目指してきている。

しかし、そのために試みられているコア・カリキュラム化は、一部科目の過剰な重点化や特定科

目間の連携の固定化をもたらす傾向を内在している。本来この横断的学習とは、今日の学習者主体の学校教育論の源流に位置する大正新教育運動における合科学習が、体育と修身・理科の連携や算数と他の全教科との連携などを勧めているように、より多様で開かれた可能性を有している（木下竹次『学習各論（上）』玉川大学出版部、1972年、p.210, pp.300-302 参照）。

### 2. 研究の目的と方法

そこで本研究では、カリキュラムの体系的性を確保しつつこの制約を緩和し、横断的学習について

の学生の柔軟な理解を保証するために、小学校教員養成カリキュラムにおける多様な教科・教職科目間の内容面における対等なウェブ型連携を実施し、学習者におけるその効果を検証した。

さて、小学校教員養成カリキュラムにおいて、多様な教科・教職科目間を横断的に実施することについては、実に多様な可能性がある。筆者らは、とりわけ、教科の指導において教師に求められる道徳的視点に着目した。道徳的な内容は、〈特別な教科 道徳〉のみならず、各教科の内容との関連をはかりながら取り上げていく必要があるものである。筆者らは、このことを踏まえ、小学校教員養成系 A 大学の学生を対象とし、「教育の思想と原理」で取り上げた道徳的な内容と関連させて、体育科、音楽科における授業場面を想定した議論型の授業を実施し、その成果と課題を検討することとした。

### 3. 事例 1: 「ルールを守って行動する」という道徳教育について

2018 年 4 月 23 日、1.2 時限開講の講義「教育の思想と原理」(山内規嗣と樋口聡の担当)に木原と寺内が参観した。そして 9.10 時限開講の「初等教育カリキュラム開発論」(木原がオムニバス授業の 1 コマを担当)に山内と寺内が参観した。この連携の視点は、「ルールを守って行動する」という内容を各講義に共通に設定したことであった。本章では、筆者の一人、木原がオムニバス授業の 1 コマを担当した「初等教育カリキュラム開発論」での授業内容と学生からの反応を振り返り、連携授業としての成果を検討する。

#### 3.1 授業の概要と連携の視点

「教育の思想と原理」では、山内が最初にデュイイの教育思想について次の説明を行った。「人間の生活が、環境との相互作用によって自らをたえず更新していく学習過程そのものであること。それは人間集団としては民主主義社会によって実現すること。それゆえ学校は『小型の協働社会』として、子どもが協同で問題解決しながら、共に生き共に社会を発展させる力を培っていく場となるべきであること。」次に、「小学校の実態」について、学生同士で意見交流が行われた。

学校内における子どもたちの問題解決の場面では、当然各自の要望が対立する場面が生じる。そして、各自の要望を調整するために、教師は学級内に様々なルールを提案し、そのルールを子

どもたちと合意する必要がある。そこで、「初等教育カリキュラム開発論」では、木原がその具体例として、小学校体育科のボール運動の授業で「ルールを守って行動する」という内容を取り上げ、体育科の授業で指導する内容が「教育の思想と原理」で論じられた内容と関連していることを学生に気づかせることを意図した。

#### 3.2 「初等教育カリキュラム開発論」の授業

本授業は、体育科のボール運動を対象に、スポーツのルールを守ることが教材として子どもたちに教えられることは何かを学生とともに考えることが目的であった。

最初に、2000 年 2 月 18 日に開催された教員養成系 A 大学附属小の体育科の公開研究授業を対象に、フラッグフットボールのルールに書いていないプレーで勝とうとする子どものプレーを紹介した。次に、このプレーを教師として認めるか認めないかの小グループ内討議を行い、各グループの意見を板書させ全体で共有した。そして、最後に木原が体育科の目標とスポーツの目標の相違をコメントした。

##### 3.2.1 課題

課題とされた子どものプレーは、紫チーム対赤チームのフラッグ・フットボールの試合中の出来事であった。赤チームが図 1 にあるように、この前の攻撃でタッチダウンしたが赤チームの攻撃はこれで終了した。得点は 8 対 7 で紫チームがわずかにリードしていた。防御の赤チームがこの試合に逆転するためには、相手の次の攻撃でクォーターバックを押し込みスタートラインより後方でフラッグを取る攻撃しか残されていなかった。



図 1 赤チームの最後の攻撃でのタッチダウン

ここで、紫チームはわざとゲーム開始の後方への味方パスを失敗して攻撃を終了する作戦を提案した。図2のように、赤チームは「卑怯だ」と猛烈に抗議し、そのために試合が止まったので、教師が話し合いに介入した。教師は、「正々堂々とプレーしよう」と指示し、紫チームのわざと失敗する作戦を認めず、攻撃するよう指示した。紫チームは教師の指示に従い、最後の攻撃を行い得点はできなかったが、8対7で紫チームがこの試合に勝利した。



図2 紫チームがわざと失敗する作戦を提案

木原は、「わざと味方へのパスを失敗して勝つという作戦はルール違反ではないが、それは『正々堂々』ではないから許されないのか？」と発問し、このプレーを教師として認めるか認めないかにつ

いて、学生の判断を求めたのである。

### 3.2.2 グループの発表と教員のコメント

各グループの意見は、図3のように板書されて交流された。「わざと味方へのパスを失敗して勝つという作戦」を「認める」と判断したグループの理由は、以下の3つに分類できた。第1に、試合の目的は勝つことであるので、勝つために工夫した子どもを肯定すべきという意見である。第2に、ルール違反をしているのではないので認めるべきという意見である。第3に、決めていないルールを後出することはよくないし、教師が一方的に指示することはよくないという意見である。

これに対して、「認めない」と判断したグループの理由は、次の3つに分類できた。第1に、体育の授業には、試合に勝つことより大切な目標があるという意見である。第2に、負けた相手がいやになる気持ちになることを教師は認めるべきではないという意見である。第3に、わざと失敗するのではなく、何事にも全力でぶつかることを教えたいという意見である。

木原はこの結果を次のように解釈しコメントした。「認める」としたグループは、試合で勝つというスポーツの目的から判断していた。他方で、「認めない」としたグループは、試合で勝つことではなく体育の目標から判断したと考えられる。体育授業は「みんなが楽しむ」ことが目標として大切である。そのために、どのような試合のルールが

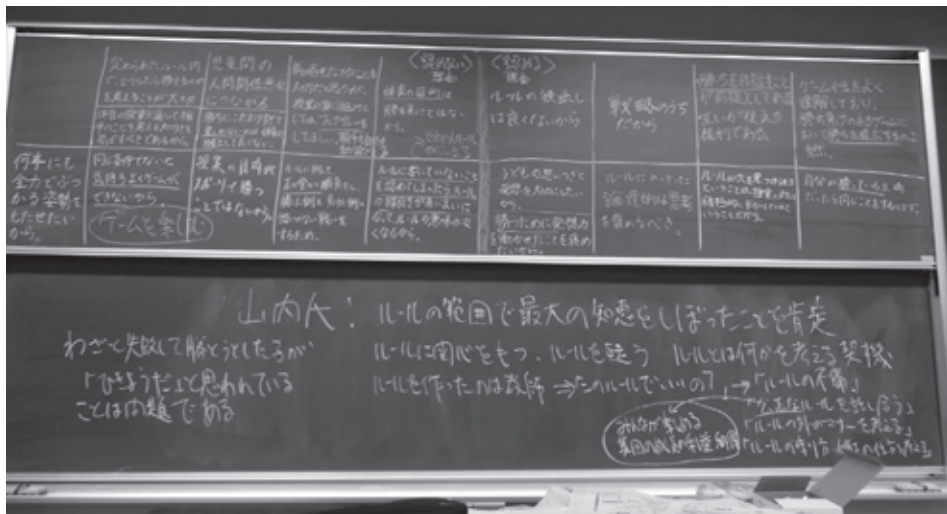


図3 各グループの意見と教員のコメントの板書

必要かを全員で合意する話し合いをすることが必要である。話し合いの過程で「ルールを合意する技能」を育成することが体育の目標として重要である。

授業の最後に山内がコメントし、図3にあるように、木原が次のように要約して板書した。

- ・ルールの範囲で最大の知恵を絞ったことを肯定
  - ・ルールに関心を持つ、ルールを疑う、ルールとは何かを考える契機
  - ・ルールを作ったのは教師→このルールでいいの？→ルールの不備
  - ・公正なルールを話し合う、ルール外のマナーを考える、ルールの守り方、修正の仕方を教える
- みんなが楽しめる集団の成員の利益、納得

さらに、寺内が発言し、図3にあるように、木原が次のように要約して板書した。

- ・わざと失敗して勝とうとした子が「ひきよりだ」と思われていることは問題である。

山内は、ルールについて話し合う学習を「みんなが楽しめる集団の成員の利益、納得」という民主主義の原理の学習として説明した。また、寺内は、試合での子どもの対立を学級経営の問題として把握することの必要性を指摘した。

### 3.3 学生からの反応—質問紙調査を手がかりに

講義の終わりに、出席した学生を対象とした質問紙調査を実施した。目的は、本講義が、学生の講義科目間の連携への意識にどのような影響を与えたかを知るためである。ここでは、その回答結果を示す。

#### 3.3.1. 選択問題より

学生に、「教育の思想と原理」と「初等教育カリキュラム開発論(体育科)」の授業科目間で「内容のつながりが見いだせた」と感じたかどうかを、4段階の尺度で回答を求めた。その結果を表1に示した。

この結果は、約3分の2弱の学生がつながりを見出していることを示している。しかし、同時に3分の1強の学生はつながりを見出していないことも示している。

表1 連携授業のつながりへの意識の有無  
N: 98

解答	人数	割合	人数	割合(%)
4: 深いつながりを見いだせた	10名	10.2%	計60名	61.2%
3: 少し深いつながりを見いだせた	50名	51%		
2: あまりつながりを見いだせない	37名	37.7%	計38名	38.8%
1: まったくつながりを見出せない	1名	0.1%		

また、「4」「3」と回答し、つながりがあると回答した学生に対して、「どのような点につながりが見出せたのか」を聞いた自由記述の中から代表的な例を以下の表2に示した。

表2 「どのような点につながりが見出せたのか」

ルールをその社会集団を構成する人が主体的に作るという点
特に5コマは科目授業→民主主義という流れが分かりやすく興味を持った
ルールをクラスで話し合う際どういう風に決めるか
民主主義社会でみんなが納得でき、有利になれることはないから
合意するためにフェア、公正とはよく言うけれど、立場によってフェア、公正は違うという点。
ルールを決めるという行為と民主主義の考え方は同じ部分があるとわかったから

これらの回答例をみれば、体育授業でスポーツのルールを合意する学習を、「学校は小型の社会」であり、「ここでの社会はもちろん民主主義社会」と山内が「教育の思想と原理」で紹介したデュエイの教育思想の具体的な例として理解している学生もいたといえる。

#### 3.3.2. 自由記述より

「小学校の教師になるための授業という点から今回のような連携した授業について何か感想があれば以下に書いてください」という自由記述の設問への回答を示す。回答は、その記述内容に応



じて、「授業内容に関する記述（議論の内容に焦点を当てた記述）」、「授業内容に関する記述（教科横断に焦点を当てた記述）」、「今回の試み（授業の連携）に対する記述」の3種類に分類した（表3）。

表3 授業への自由な感想

<p>授業内容に関する記述（議論の内容に焦点を当てた記述）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このように想定しなかったことが色々おこるのだと思うと、対応することにむずかしさを感じた。</li> <li>・教師になってぶつかるであろう一つの壁を今回の授業で考えることができたのはよかった。</li> <li>・児童が自分の意見を他人に伝え、そこからお互いの主張を聞いて納得できるような結論を導くことが大切だと思った。</li> <li>・子どもたちで意見の食い違いが起こりけんかになりそうになったときどのように対応すればよいのかは本当に難しい問題だと思った。</li> <li>・民主主義とはどういうものか、あまり考えたことがなかったが、今回の授業で考えることができて良かった。</li> <li>・決まりというのはよくつくられていると思いました。</li> <li>・万人が納得することの難しさを感じた。</li> <li>・体育の他の授業と異なる点について少し知ることができて良かったと思います。</li> <li>・このような複数の視点から考えることは、とてもためになった。</li> <li>・似た考えの人と話し合っ意見进行交流するのは楽しかったです。</li> </ul>
<p>授業内容に関する記述（教科横断に焦点を当てた記述）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・根本は同じことでも、異なる視点で見ること、こんなにも見えてくるものがちがうのかと正直驚きました。とても興味深く、眠くならなかったです。</li> <li>・「教育の思想と原理」の授業だけでは分からなかったことも、こうやって実際の教科とつなげて、事例とともに考えることでイメージがわかりやすくなるので良かった。</li> <li>・教職の講義では抽象的なことを考えたり、こういう考え方が大切だよ～と教わるだけで実践的な何かを得られた感じがしないので、5コマの講義で具体的な事例を考えることができて分かりやすかったように思う。</li> <li>・授業同士のつながりという点で、規則に対する理解が深まったように感じた。小学校教師は各教科やそれ以外での学びをつなげていくことが求められていると思うから、とても勉強になった。</li> <li>・思想や哲学のような授業は、どうしても実践と結びつかず、ぼんやりとしたものになりやすいので、今回のような授業はおもしろかった。</li> <li>・「思想と原理」のような小学校の授業のスキルに直接関係ないような授業と連携することでその重要性を理解できた。</li> <li>・1コマの授業と連携することで、1コマの内容もわかりやすくなった。</li> <li>・道徳教育が単体のみで存在するだけではなく他教科との繋がりを持って教えることが出来るとわかった</li> <li>・とても良いと思います。各教科、教えるだけでなく、こうした道徳的なことも踏まえて授業をしていくべきだと考えるからです。</li> <li>・今回でいうと、「民主主義」について、その定義などをつらつら言われてもあまり理解できませんがさまざまな分野の先生方から、具体的な状況をふまえてお話を聞くことができたので、民主主義のあり方について想像しやすかったし、学びやすかったです。</li> </ul>
<p>今回の試み（授業の連携）に対する記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1つの題において様々な先生の意見を聞く事ができうれしかったです。</li> <li>・学んだことにつながりを見出せるので良いと思います。</li> <li>・おもしろかったです。事前にあまり詳しい内容（つながりの部分）を知らされていなかったからこそ、気付いたときに印象に残りました。</li> <li>・1コマ目に習ったことを同じ日に応用できて、良い意味で疲れる授業だった</li> <li>・連携することで、そのテーマについて多くのアプローチをしながら考えることが出来るのでより深い学びになると思います。</li> <li>・長いあいだ研究をしているちがう分野の先生が質問することは、新しい観点があるしおもしろかった。</li> <li>・繋がりが授業間にあるのはすごく自分の考えを深められるからためになるなと思った。</li> <li>・面白かった。授業のつながりがあると、考えもふくらむし、前の授業が活かせる+復習にもなって、より深い内容に感じられた。</li> <li>・学んだことが、他の授業で生かせるのはとても良いと思った。</li> <li>・私は連携するならお互いのことを意識させ合えるよう授業するのが大切だと思います。ここのこの部分が○○の授業でもできてきたよね？○○○○って大切だよね？と入れること学習者を意識することで、より高度な学びになると思います。</li> </ul>

### 3.4 成果の検討と今後の課題

本講義が、学生の講義科目間の連携への意識に与えた成果は次の3点であった。第1に、2つの講義の内容について関連して理解した学生がいたことである。「3.3.1. 選択問題」で指摘したように、「教育の思想と原理」で紹介されたデューイの教育思想の具体例として、体育授業でスポーツのルールを合意する学習を理解した学生がいたのである。

第2に、小学校教師の資質として、教科指導とその他の領域の指導をつなぐことが求められていることを意識する契機を生んだことである。「表3 授業への自由な感想」の「授業内容に関する記述（教科横断に焦点を当てた記述）」で次のように書いた学生は教科とそれ以外の学びや道徳教育を同じ子どもに指導する小学校教師の資質に気づいているといえよう。

「小学校教師は各教科やそれ以外での学びをつなげていくことが求められていると思うから、とても勉強になった。」「『思想と原理』のような小学校の授業のスキルに直接関係ないような授業と連携することでその＜思想と原理の：引用者注＞重要性を理解できた。」「道徳教育が単体のみで存在するだけではなく他教科との繋がりを持って教えることが出来るとわかった」「とても良いと思います。各教科、教えるだけでなく、こうした道徳的なことも踏まえて授業をしていくべきだと考えるからです。」

第3に、小学校の教員養成を担当する教師がそれぞれの専門性を授業の中で交流することが、学生の興味や学習の深まりを生んだことである。「表3 授業への自由な感想」の「今回の試み（授業の連携）」に対する記述」の次のような記述はそのことを示している。

「1つの題において様々な先生の意見を聞く事ができうれしかったです。」「連携することで、そのテーマについて多くのアプローチをしながら考えることが出来るのでより深い学びになると思います。」「長いあいだ研究をしているちがう分野の先生が質問することは、新しい観点があるしおもしろかった。」

もちろん、学生の3分の1強が「内容のつながりが見いだせた」と考えていないという結果は、連携授業の方法や内容の改善が必要であることを示している。今後の課題としたい。

### 4. 事例2：小学校音楽科の器楽合奏活動における担当パートの決め方について

本章では、筆者の一人、寺内が担当している「音楽科学習指導論」での授業内容と学生からの反応を振り返り、連携授業としての成果を検討する。

#### 4.1. 授業の概要と連携の視点

本授業で取り上げた題材「器楽合奏のパートの決め方を考えよう」は、小学校音楽科や学校行事での器楽合奏活動における、担当パート（楽器）を決める場面を想定し、どのような決め方が考えられるかを学生同士で議論するものである。本授業は2018年7月17日の「音楽科学習指導論」（選択科目）にて実施した。主に1年次生を対象とし、授業実施日の出席者は76名であった。授業者は寺内、オブザーバーとして、木原・山内が参加した。

他教科等との連携については、次の2点が意識されている。1点目は、音楽科に限定されない題材を取り上げることによって、学生の教科横断的な視点の獲得を促すことである。「決め方」を考えるということは、例えば、所属する委員会や担当する係活動を決める場面、体育科では、リレーの走順を決める場面など、学校生活の様々な場面で必要とされることである。2点目は、「特別の教科道徳」との関係を学生に意識させることである。何かの役割を決めることは、「特別の教科道徳」の内容「1 主として自分自身に関すること」、「2 主として他の人とかかわりに関すること」、「4 主として集団や社会とかかわりに関すること」のいずれにも深く関係している。平成27年に告示された「特別の教科道徳」で「考え、議論する道徳」という方針が打ち出されているが、児童同士の議論を教師がファシリテートするためには、教師自身が多様な視点を持つことが不可欠である。本題材のような「正解のない問い」について議論を行うことは、学生の視点を広げることに寄与することが期待できると考えた。

#### 4.2. 授業でのワーク

##### 4.2.1. 課題

授業では、小学校音楽科における架空の一場面（器楽合奏のパートを決める場面）を示し、適切な決め方について、グループでの討議を行った。学生には次のような条件を示し、「できるだけみんなが幸せになれるような決め方を考える」という

課題を設定した。

条件 1：1 クラス 35 名を想定

条件 2：合奏で使える楽器は右のとおり（表 4）

#### 4.2.2. グループ討議と発表

まず、グループ（全 12 グループ）のなかで、グループ討議を行った。その後、グループ内での意見をまとめ、グループごとに考えた「決め方」やその背景を発表し、その内容について授業者と短い対話を行った。表 5 は、発表した 9 つのグループについて、発表と対話のなかに含まれていた決め方の提案内容とその提案の背景を、発表の一部始終の録音をもとに要約したものである。

表 4 合奏で使える楽器

担当パート	人数
アコーディオン	6
木琴	4
鉄琴	2
ピアノ	1
カスタネット	1
トライアングル	1
ドラム	1
鍵盤ハーモニカ	大勢
リコーダー	大勢

表 5 グループ討議で学生が考えた決め方とその背景

グループ	提案した決め方	提案の背景
A	各児童が第 1 希望から第 3 希望まで希望を出す。定員がオーバーした場合は、グループ内で譲り合うか話し合いをする。	第 3 希望まで希望をとる理由は、その後の話し合いを円滑に進めるため、また、本当にやりたくない楽器を担当することを避けることができるためである。
B	まず、教師がすべてのパートの役割を説明する。児童は、その説明を聞いたうえで自分の希望パートを考える。このとき、教師は、各パートの予定人数に希望者人数の過不足があった場合には、じゃんけんによって決定することを児童に伝えておく。各自の希望は黒板に書いていく。楽器によっては教師から「ピアノは経験者の方がよいのでは？」などの提案を示して再考の機会を作る。児童は、黒板に記された希望人数を見ながら希望を変えることができる。この段階で、定員と希望人数が一致したパートは決定とする。過不足があるパートはじゃんけん決定する。	はじめに全てのパートの役割を説明する背景には、各楽器の良さを適切に伝えることによって、児童の楽器に対する先入観を払拭し、楽器選択の幅を広げたいということが意識されている。じゃんけんを決めるということをあらかじめ伝えておくという提案の背景には、決め方の段取りを伝えることで、競争率の高そうなところを狙うよりも、最初から競争率の低そうなところを狙おうと考えるなど、児童が決め方を理解したうえで自らの希望の示し方を考えるだろうということが意識されている。黒板に希望を書く方法をとる理由も同様である。教師から「ピアノは経験者の方がよいのでは？」などの提案を示す背景には、パート選定の必然性を児童に納得してもらいたいということが意識されている。
C	はじめにピアノのパートを経験者から選ぶ。本人がピアノを希望していない場合は、教師からお願いをする。次に、教師が他の楽器の魅力を伝えて希望をとる。希望者が多いパートはじゃんけん決定する。	はじめにピアノの経験者を選ぶことには、演奏経験を重視したいという考えが反映されている。
D	決める前に楽器の説明をし、楽器に触れる時間をとる。その後、児童から希望を聞いて黒板などに示す。もめる場合にはじゃんけん決定する。じゃんけんを負けた児童には、教師からその児童の心情に配慮したサポートをする。	楽器の説明をする背景には、各パートの大切さを学ばせたいということが意識されている。楽器に触れる時間を設ける背景には、実際に体験することによって児童の希望がより明確になるということが意識されている。
E	まず、児童の希望を聞く。希望人数が多いパートはじゃんけん決定する。このとき、じゃんけんを負けた児童は、次の演奏の機会に優先権をもつ。	じゃんけんを決める背景には、児童の技術や努力に関係なく機会を与えたいということが意識されている。じゃんけんを負けた児童に次の機会の優先権をもたせることには、児童の学習の機会を、その時の活動だけでなく長い目で捉えるという発想が反映されている。

F	<p>(グループFは、2つの方法を提案した。)</p> <p>①第一希望の楽器に挙手をさせ、黒板などに書いていく。過不足のあるパートは、人数の多いパートから足りないパートに変更する可能性を話し合う。話し合いで解決できない場合にはじゃんけんで決める。第一希望のパートになれなかった児童は、できるだけ上の希望のパートになることができるように工夫する。</p> <p>②事前に紙を配り、友達同士で話し合いながら希望を記入する。</p>	<p>挙手して書く方法を提案している背景には、各自の第一希望を全員で共有したいということが意識されている。次に、話し合いをしてじゃんけんをする方法を挙げている背景には、第一希望から移動した(他の児童に譲った)児童の希望をできるだけ叶えたいということが意識されている。希望を出す方法として、挙手と記入という2つの方法を提案した背景には、各児童にとって他の児童の希望が見える場合と見えない場合それぞれのメリット・デメリットが考慮されている。さらに、友達同士で話し合って希望を書くという方法の背景には、友達関係を楽器選択の根拠とすることへの配慮が反映されている。</p>
G	<p>まず、ピアノが弾ける児童から決める。その児童がピアノを希望していればピアノ担当にし、希望しなかったらピアノパートはなしとする。次に、リコーダーと鍵盤ハーモニカの担当を決定する。その後、アコーディオンからドラムまでの楽器分担を決定する。希望者のいない楽器は使わない。希望人数が多い場合は、編曲したり演奏回数を増やしたりして、可能な限り希望楽器が担当できるようにする。</p>	<p>ピアノが弾ける児童がピアノを希望しなかったらピアノパートをなしとすること、また希望者のいない楽器は使わないこととするものの背景には、児童の技能を考慮しながらも希望を優先することが意識されている。決められた条件に児童を当てはめていくのではなく、児童の希望を優先したうえで、曲や楽器編成を合わせていくという考えが反映されている。</p>
H	<p>数に限りがある楽器について、経験の有無を事前調査する。次に、第1希望から第3希望までとる。このとき、数に限りがある楽器の希望者が多い場合は、経験がない児童が優先されること、ピアノやドラムは複数人で担当することもできることを伝えておく。</p>	<p>楽器経験のない児童の希望を優先することを提案した背景には、経験の機会均等が意識されている。また、未経験の楽器を演奏することで満足感や楽しさを感じることができるようにという教育的配慮が意識されている。</p>
I	<p>希望がない楽器については、活躍する(目立つことのできる)ソロなどの場面を作る。ただし、目立つことを苦手とする児童が担当している場合は実施しない。</p>	<p>活躍する場面を作るという提案の背景には、自分が演奏している実感をより強く味わわせたいということが意識されている。</p>

#### 4.2.3. グループ討議と発表の後で授業者とオブザーバーから示した内容

本稿では、グループ討議と発表の後に授業者とオブザーバーから学生に示した内容を記述する。

まず、授業者からは、「活動の趣旨との関係」、「希望順位のみならず希望の強さへの意識」、「1つの楽器を複数人で担当したり1人が複数の楽器を担当する可能性、また、そのことを前提とした編曲などを行う可能性」、「決め方自体を児童が納得しているかどうか」という4つの視点を述べた。このなかには、前項で述べた学生からの意見と重複する視点もあった。

また、「器楽合奏のパート決め」という活動に含まれる道徳的視点として、公平性、他者への敬意、協調性を挙げた。

グループ討議の内容に関わることについては、児童の希望によって楽曲を編曲するといった、音楽科特有の方策を含ませる提案についての補足説明を行った。楽曲を編曲することは、その程度によっては、教員に音楽に関する高い専門性が求められるが、用いる楽器を演奏の途中で交替したり、

必要に応じて演奏の長さを調整したりする(例えば、原曲は3番までの楽曲を4番まで演奏するなど)といった簡易な改変によって解決できる場合もあるため、専門性の程度に関わらずこの発想を持つことが大切であることを示した。最後に関連書籍として、佐伯胖『「きめ方」の論理—社会的決定理論への招待』東京大学出版会、1980年、佐伯胖『決め方の大研究—どんな方法があるの?—ジャンケンから選挙まで』PHP研究所、2012年、坂井豊貴『多数決を疑う—社会的選択理論とは何か』岩波書店、2015年、の3冊を紹介した。

木原からは、体育科教育専門の立場から「情報の見せ方」、「説明の仕方」、「子どもの思い」といった手続きの問題は体育科にも共通する視点であること、一方、編曲による解決策のような音楽科特有の方策については、専門性を高めることによって出せる案がより幅広くなることが示された。

山内からは、教育原理の立場から、教育の目標・目的との関連を取り上げた。「できるだけみんなが幸せになれるような決め方を考える」という課題設定から、すべてのグループは児童の希望をいか



に叶えるかということを意識した討議を行っていたことを取り上げ、教育というプロセスの中で、どのように「幸せ」を捉えるかは、すべての教科に共通する教育の根本にある考え方であることが示された。そして、必ずしも「希望が叶うこと」がイコール「幸せ」とは限らず、希望とは異なる楽器を経験し、その楽器のよさを学ぶことによって得られる幸せや、たとえばはじめは嫌だったとしても役割を果たすことによって得られる幸せもあるという視点も示された。道徳教育との関連については、決め方を考えることを通じて、フェアな感じ方・考え方を身に付けていくことの大切さが示された。

#### 4.3. 学生からの反応—質問紙調査を手がかりに

講義の終わりに、出席した学生を対象とした質問紙調査を実施した。目的は、本講義が、学生の「特別の教科 道徳」を含む教科横断への意識にどのような影響を与えたかを知るためである。ここでは、その回答結果を示す。

##### 4.3.1. 選択式記述より

まず、本講義の内容が、「特別の教科 道徳」と「音楽科」との関わりについての意識に関する設問「本日の議論をとおして、小学校における「特別の教科 道徳」と「音楽科」とのつながりに対する意識は変わりましたか」への回答を示す(表 6)。

表 6 「特別の教科 道徳」と「音楽科」との関わりについての意識

	人数 人	割合 %
「特別の教科 道徳」と「音楽科」とのつながりは、これまであまり意識していなかったが、本日の議論を経ても、これらの科目のつながりはあまり見いだせない。	0	0
「特別の教科 道徳」と「音楽科」とのつながりは、これまでも意識しており、本日の議論がこれらの科目のつながりをより強く意識する機会になったわけではない。	0	0
「特別の教科 道徳」と「音楽科」とのつながりは、これまであまり意識していなかったが、本日の議論は、これらの科目のつながりを意識する機会になった。	65	86
「特別の教科 道徳」と「音楽科」とのつながりは、これまでも意識していたが、本日の議論は、これらの科目のつながりを一層意識する機会になった。	11	14

次に、他の教科とのつながりとの意識に関する設問「本日の議論は、小学校の他の教科ともつながりがあると思いますか」の回答を示す(表 7)。学生全員が「おおいにつながっていると思う」「ややつながっていると思う」と肯定的に回答していた。

表 7 本授業での議論と、他の教科とのつながり

	人数 人	割合 %
全くつながらないと思う	0	0
あまりつながらないと思う	0	0
ややつながっていると思う	14	18
おおいにつながっていると思う	62	82

次に、上記の回答で「おおいにつながっていると思う」「ややつながっていると思う」と回答した学生(全員)に、「特別の教科 道徳」以外のどの教科とつながっていると思うかを訊ねた(複数回答可)。表 8 はその結果である。

表 8 本授業での議論がつながっていると思う教科

教科	人数(人)
国語科	28
算数科	20
理科	25
社会科	33
生活科	62
図画工作科	44
家庭科	46
体育科	66
外国語活動・外国語科	23

##### 4.3.2. 自由記述より

次に、「小学校の教師になるための授業という点から今回のような連携した授業について何か感想があれば以下に書いてください」という自由記述の設問への回答の一部を示す。回答は、その記述内容に応じて、「授業内容に関する記述(議論の内容に焦点を当てた記述)」、「授業内容に関する記述(教科横断に焦点を当てた記述)」、「今回の試み(授業の連携)に対する記述」の3種類に分類した(表 9)。

表9 自由記述の内容（原文ママ）

授業内容に関する記述 （議論の内容に焦点を当てた記述）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師はやはり、周りをよく見て気づく能力が大切だと感じた。</li> <li>・教科には様々な視点が必要なのと思った。</li> <li>・道徳という公正さは児童達にとってあらゆる場面で教えられることが分かりました。</li> <li>・実際自分が現場に出たことを考えるとこういうことをやっていく回数を増やしたいと思います。</li> <li>・今回のような決め方の話のとき、個人の意見とみんなの意見を元にした意見には差異があるように思う。</li> <li>・決め方について興味がわきました。これは小学校教師に将来なった際に役に立つと思います。</li> <li>・クラスをうまくまとめたりひっぱっていく上でとても大切なことを学びました。</li> <li>・答えのない内容が多いのが、その分議論が盛り上がり、実践的な学びになっていると思う。このような授業をもっと受けていきたい。</li> <li>・教科教育は教科を教えるだけでなく「私たちが幸せになれる方法」を考えさせることも目的であるということに気づかされた。</li> <li>・音楽の楽しさは演奏などから得るためには、やはり決め方つまりは取り組みの一番最初の段階がうまくいく必要があると思った。</li> <li>・音楽や学活など、決めることがある教科についてすごく役立つと思いました。いろいろな決め方があり、奥深いなあと思いました。</li> </ul>
授業内容に関する記述 （教科横断に焦点を当てた記述）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校など学校では、人間を育てる場であると思うので、道徳などとの連携は必要かと思います。</li> <li>・小学校教育は、特に教科間連携、他教科へのつながりを大切にしていると思うので、とても興味深い内容だった。</li> <li>・細分化されている学問の中で、共通項を見つけ、幅広い視点を持つことが必要だと改めて考えた。</li> <li>・他教科とのつながりを考えるのはおもしろいと思う。</li> <li>・これから各教科を学んでいく時に、つながりを意識しながら授業をうけたいと思いました。</li> <li>・色々な教科の視点から学べておもしろいと思いました。</li> <li>・全ての教科がつながっているというつながりを意識しやすく、とてもいいと思った。</li> </ul>
今回の試み （授業の連携）に対する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つながりを意識することができたと思う</li> <li>・他教科とつながりを感じることでできるよい授業だった。</li> <li>・普段あまり意識しにくいところまで考える良い機会になりました。</li> <li>・今までは別々のものだと思っていたものがよく考えるとつながっていることに気づき感動した。</li> <li>・新しい考え方が増えたとし、連携した授業をうけたことで、これから他の授業でも意識できるとおもった。</li> <li>・広い視野で教育の目的、共通点、相違点を感じるすることができた。</li> <li>・これまでそんなに意識したことがなくて、今回の経験を通して視野が広がったように思った。将来生かしていきたい。</li> <li>・連携した自分が将来教師になった時に実践できる方法や考え方が身に付けられると思うので良いと思います。</li> <li>・授業を受けるたび、教師への意識が高くなります。</li> <li>・各教科それぞれで学ぶことをその授業だけで終わらせるのではなく、他とのつながりを考える良い授業だと思う。</li> </ul>

#### 4.4. 成果の検討

##### 4.4.1. グループ討議の成果

表9にみられるように、学生からの提案は実に多種多様であり、それぞれに異なる理由が意識されたものであった。授業では、こうした異なる提案を共有することによって、自分たちのグループの考えを相対化させながら考える機会をつくれる

ことができた。このことは、「特別な教科 道徳」をファシリテートする上で重要となる多様な視点を獲得するという点で、一定の意義があったと考えられる。

##### 4.4.2. 複数の教員が関わることの成果

4.2.3.で述べたように、本講義では、2名のオブ

ザーバーが、それぞれ異なる立場からの視点を学生に示した。これらは、授業者だけでは示すことのできなかった視点である。これらのコメントが授業終了時に示されたことは、学生の視点が一層広がるきっかけになると思われる。

#### 4.4.3. 質問紙調査によって明らかになった成果

表 6, 表 7, 表 8 の結果から、学生の「特別の教科 道徳」を含む教科横断的な視点の獲得については、概ね成功したといえる。また、表 9 のように、本講義で木原がコメントした体育科のみならず、他の教科にも関連性を見出している学生が少なくなかったことは、学生がそれぞれの観点で他教科とのつながりを見出していたことが窺える。

自由記述からも、教科横断の重要性に触れている記述は多く、その中には、教科をこえて「人間を育てる」という視点に基づいた記述もあった。

#### 5. 成果と課題

各科目を対等に位置付ける 2 組の科目間連携の結果、それぞれの科目における内容の多面的・多

角的理解の深化というかたちで学習効果が認められたことに加えて、学生の教科横断的な視点やその必要性の認識が獲得されたことが確認できた。さらに、この視点を今回の実施科目以外にも適用してみようとする関心意欲も生起させていることから、横断的学習についての学生の柔軟な理解を促進するという所期の目的を一定程度満たすものと結論することができる。

その一方で、学習者全体にこの理解を獲得させるためには、学習者がもつ各科目・カリキュラムについての認識や学習経験に基づいて、科目間連携の内容をさらに改善していく必要がある。これについては今後の課題としたい。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 17K048645 助成を受けたものである。

#### 付記

検討は全員で行い、1.と 2.と 5.を山内、3.を木原、4.を寺内が、それぞれ執筆を担当した。